英米文化の背景
「英米人の迷信・俗信」考（13）Ⅳ　年中行事
—その2　聖ヴァレンタイン祭とそのルーツ・聖デイヴィッド祭とリーキ・アイルランド人の聖パトリック祭・節欲の四旬節・懺悔節火曜日とパンケーキ

藤高　邦宏

倉敷芸術科学大学生命科学部

（2004年9月24日　受理）

は　じ　め　に

人々の毎日の暮らしは、ともすると単調になりがちである。その単調さにリズムをつけ、人々の心と体に活気を与えて生活を引き締め、人々が自然に対して改めて畏敬の念を抱き、その恵みと幸福な生活をもたらせてくれる神々へのさらなる感謝の念を表そうと、人々は諸祭、諸行事を催す。人々が祭りや行事に参加することは、その共同体社会の伝統、ひいては民族の伝統を引き継ぐことになり、その点で極めて意義深いことである。

今号では、年中行事のうち2月から3月にかけての諸祭、諸行事を取り上げる。聖ヴァレンタイン祭の由来や、日本での女性から男性へのチョコレートのプレゼントの習慣に関する由来の真実について、また英米人にとっての大きな祭りとされる復活祭に至る前の四旬節の意味と、その直前の懺悔節火曜日に焼かれるパンケーキの習慣のルーツ等に至るまで、それらの多様な習慣と伝統、およびそれに纏わる迷信、俗信について、若干の文芸用例をも加味しながら考察を試みたい。

1　聖ヴァレンタイン祭 St. Valentine's Day（2月14日）とそのルーツ

教会暦の2月14日は恋人たちの祭りである。この日は恋人たちの間で、カードや赤いバラやその他の贈り物を交換する日として広く知られる。

この祝祭日の名称ヴァレンタインの起源については、ほとんど不明であるとされる。名前の由来とされる初期キリスト教におけるヴァレンタインという名の二人の聖人（殉教者）については、実在とはされているが、その生涯にも不明なことが多く、両者の祭日がともに2月14日である[1]ということ以外には、聖ヴァレンタイン祭とは何らの関係もないとされるのが通説である。また不道徳なことで関心をもたれ、2月15日に行われたとされる古代ローマのルーパーカス祭 Lupercalia と結びつける考え方にも、それを立証する証拠はないとされる。

この祭りの起源としては、上記の諸説よりもむしろ中世の伝説にそれを求めることができそうである。実はこの日には、小鳥たちが春を迎えて巣作りをする前に「番う相手を選ぶ」という言い伝えがある。これに関して Geoffrey Chaucer は次のような詩行を残している。

For this was on Seynt Valentynes day,
Whan every foul cometh there to chese his make,
of every kynde that men thynke may. [2)]
(今日は聖ヴァレンタインの祝祭日で、鳥たちは皆やってきて、
これぞと思うそれぞれの伴侶を選んだ。)

また同様のことが John Donne によっても記されている。Donne は1613年2月14日の王室の結婚式に際し、祝婚歌を作詞している。次はその冒頭の部分である。

Haile Bishop Valentine, whose day this is, / All the Aire is thy Diocis,
And all the chirping Choristers / And other birds are thy Parishioners, / ... [3)]
(ようこそ、聖ヴァレンタインさま、今日はあなたの日、空気のある処は、すべてあなたの教区。そして、すべての美しくさえずる合唱隊も、また他の小鳥たちも、あなたの教区民なのです。、、、)

この日は「鳥が番う日」という考え方から、人々の間では、一日だけのヴァレンタイン（すなわち恋人）を選ぶという習慣が生じた。この日の「恋人選び」には、大きく分けて二つの方法がある。一つは「くじ引き」であり、もう一つは「偶然の出会い」である。

くじ引きによって恋人を選ぶ慣習は、おそらくは宮廷から始まったものであろうが、今日も一部続けられていると見てよいであろう。その方法は、細長い紙片に女性の名前を書き、それを男性が順に引くのが普通であったが、趣向を凝らしたその他の方法も取り入れられたようである。しかし、中にはうまく仕組んだくじもあったことであろう。

もう一つの「偶然による恋人選び」は、この日、自分の家族以外の最初に出会う異性を恋人として受け入れる、という方法である。そのため、自分の好む人物に会うまで目隠しをしたり、目を閉じているわけである。目を閉じることは許されるルールであった。しかし、これも好ましい相手に出会えるように、うまく仕組むことが可能だと言えそうである。

一日だけの恋人選びの慣習は、転じて未来の結婚相手を占なうのにもよい日であると考えられた。これに関する伝承には、次のようなものがある。

☆「少女が、黄色いクロッカスを衣服のボタン穴に差していたら、生涯の恋人（結婚相手）に出会うチャンスが大きくなる。」[4)]

☆「少女が、この日朝早く家を出て最初に出会った人が男性であったなら、彼女は3か月以内に結婚するであろう。」また「彼女は、出会ったその男性と結婚する可能性が高い」とも言われる。

☆「未婚者が、この日最初に出会う未婚の異性は、その人にとってのヴァレンタインであり、将来の自分の運命に大きな影響を及ぼす人となる。」また、このような考え方による配偶者の選択にもっと自由があってもよいと考える人には、「それをかわす簡単な方法がある。そ

れは、正午きっかりにこの魔力が解けるまで、断じて家から一歩も出ないことである。」

☆「この日、少女が最初に目にする鳥によって、未来の結婚相手のより詳しい情報を得ることができる」と言われる。これについては次のリストがある。クロウタドリ＝聖職者、ブルーバード＝幸福な人、あるいは貧乏人、イスカ＝喧嘩好きな人、ハト＝善良な人、ゴシキヒワ＝金持ち、ロビン＝船乗り、スズメ＝農夫、そして、キツツキ＝誰とも結婚しない、等である。[5)]

☆「恋人選びのくじで、3度続けて同じ結果が出れば、2人は必ず結ばれる。」これは広く一般的に言われたことであり、恋の遊びが本物になることもあったであろう。

☆「ヴァレンタイン祭の前夜に、若者たちは各自がそれぞれの紙片に名前を書き、男性と女性の紙片を別々に袋に入れる。女性は男性の袋から、男性は女性の袋から連続3回引く。3回とも同じものを引けば、その人が将来の配偶者になる。」これは、特にスコットランド南部、およびイングランド北部地域に伝えられるものである。

こうして恋人が決まると、愛のメッセージが届けられることになるが、これがヴァレンタイン・カードのもとの姿であり、起こりであったと考えられよう。この愛のしるしは、長い間手書きのものが多かったが、やがて18世紀末頃になると、イギリスあたりでも印刷されたカードが少しずつ出回るようになったとされる。[6)] また、この愛のカードは、古くからの慣例として署名されないで届けられるものなので、受け取る者は贈り手が誰なのか推測し、甘美な思索に耽って時を過ごすこともあるであろう。因みに、Ad de Vries によると、「愛」に関しては、Valentine の語には Token of true love（真の愛のしるし）の意味合いがあるとされ、その用例として、Shakespeare, *The Two Gentlemen of Verona* から、There's not a hair on's head but 'tis a Valentine.（髪の毛一本一本までが、すべてヴァレンタインそっくりです。）の一文が引用されている。[7)]

こうして恋人に愛のカードを贈ることは、同時に贈り物をすることにもつながった。次の引用は、（くじ引きで）恋人が決まった場合の贈り物の習慣を例証する Samuel Pepys の日記（1667）の記述である。

> ... to Mrs Pierce's, where I took up my wife and there find that Mrs Pierce's little girl is my Valentine, she having drawn me—which I was not sorry for, it easing me of something more that I must have given to others. [8)]
>
> （、、、ピアス夫人宅へ妻を連れて行ったが、そこでピアス夫人の娘さんが私のヴァレンタインになった。くじで私を引き当てたのだ。別に残念とも思わなかった。おかげで気が楽になったからだ。そうでなければ、きっと他の人たちにもっと何かあげることになったに違いない。）

往時の贈り物の品には、お決まりの品である手袋の他、靴下留め、さらに農村の若者たちの藁を編んだ恋結び love-knot もあれば、一方裕福な人々の間では、高価な宝石類も贈られたよう

である。

これらのヴァレンタイン祭のカードと贈り物の人気の推移については、18世紀中葉には高価な贈り物はされない風潮になり、初期の頃から続いていた恋歌の人気が高まり、念入りな装飾や趣向を凝らした手紙や、絵の入ったカードを恋人に贈るのが流行した。恋歌は自作もあれば、教本から採られたりもしたようである。やがて印刷された市販のカードも出回り、1870年代80年代には頂点に達した。ヴィクトリア朝の終わり頃になると、人々の趣味が洗練されたためであろうか、ヴァレンタイン・カードを贈る習慣は大変下火となった。そして第2次世界大戦後、再び盛んになり、現在ではかなり顕著な習慣になっていると言えよう。最近ではヴァレンタイン祭の新聞広告欄で、風変わりな愛称の恋人に愛のメッセージを捧げる新たな風習も広まっているようである。因みに、贈り物に関しては、今日一般的に人気のある品としては、紫色の紙に包んだハート形のチョコレートとか、石竹色のふわふわした毛に覆われたぬいぐるみの熊などが挙げられるようである。[9]

ところで、日本の人々の間で見られる習慣として、ヴァレンタインの日に「女性から男性にチョコレートを贈る習慣」がある。しかしながら、実のところ、この習慣に対する本場文化からの正当な説明や根拠は全くなく、この習慣は、あくまでも商魂逞しい日本の業者によって考案されたものであることを付記しておきたい。

聖ヴァレンタインの日のための伝統的なライムが、Margaret Joy によって次のように引用されている。

> Good morrow to you, Valentine, / Please to give me a Valentine.
> I'll be yourn if ye'll be mine： / Good morrow to you, Valentine. [10]
> (おはようございます、ヴァレンタイン様、どうか私に恋人を与えてください。
> あなた様がわたしのものとなるなら、わたしもあなた様のものとなりましょう。
> おはようございます、ヴァレンタイン様。)

2 聖デイヴィッド祭 St. David's Day (3月1日) とリーキ

聖デイヴィッド St. David (ウェールズ語では、ダヴィズ Dafydd またはデウイ Dewi、520年頃－588年) はメネヴィアの司教であるとともに、その地に創建された修道院の院長を務めた聖人で、中世初期以来ウェールズの守護聖人として崇敬されている。同聖人の祝日には、必ずリーキ leek を身につけてこの日を祝う習慣がある。このリーキとは、強烈な匂いのする一種の西洋ネギ (あるいはニラ) である。Shakespeare, *Henry V* には、古くからこの日にはリーキを身につける習慣があったことが窺われる箇所が見られる。

> But why wear you your leek today？ Saint Davy's day is past. [11]
> (だが、なぜ君は今日リーキをつけているのかね。聖デイヴィッド祭は済んだのに。)

リーキの由来については、いくつかの言い伝えがある。一つは、かつてウェールズ軍がサク

ソン軍と戦ったときに、味方の識別のためにそれを身につけたとされ、またその戦勝記念として、その祝日にそれを身につけるのだという説がある。ところが、戦争に関連する点では同じであるが、Shakespeare は *Henry V* の中で、リーキを身につけるこの慣習を、1346年の Crecy の戦いと関係づける扱いをしているようである。

> ... the Welshmen did good service in a garden where leeks did grow, wearing leeks in their Monmouth caps,... [12)]
>
> (、、、ウェールズ人は、マンマス帽にリーキをつけて、まさにリーキの生い茂る庭で大手柄をたてましたのじゃ。、、、)

この箇所は、エドワード黒太子 Black Prince の率いるウェールズの長弓兵たちが、リーキの生い茂る庭で大活躍をしたとの意味であるが、ここではリーキが強調的に扱われている。

二つ目には、リーキの葉鞘部の一部が緑色をしており、その色合いが昔のウェールズの軍旗に似ているとする説がある。またこれに関連して、葉鞘部の白色と緑色はウェールズの近衛兵の帽子の羽根飾りとなり、今日でも他と区別されている。ウインザー城では、聖デイヴィッド祭に最も近い日曜日に、ウェールズの全近衛兵に王室よりリーキが一本ずつ与えられることが伝統行事になっている。

三つ目は、リーキが血液を浄化する働きをもっており、ウェールズ人の好物であったとする単純な見方もある。

四つ目として、リーキが聖人を象徴するとの考え方もある。その根拠として、聖人が菜食主義者で「水だけの苦行者 Aquaticus」の異名をとるほど、厳格な禁欲生活を営んだとの故事を挙げたりする。

リーキとの関連性にどのようないわれがあろうとも、ウェールズの人々は自分たちの守護聖人の祝日には、この植物を身につける慣習を相変わらず守り続けている。因みにウェールズの軍隊では、昔からの慣例として、新兵たちが太鼓の音に合わせて生のリーキを一本丸ごと食べる儀式が今日も行われている。

3　アイルランド人の聖パトリック祭 St. Patrick's Day（3月17日）

聖パトリックはアイルランドの聖人であるが、アイルランドの生まれではなく、恐らく西スコットランドかウェールズでA.D.390年頃に生まれたのであろうとされる。幼い頃アイルランドの海賊に捕らえられ、6年間奴隷の生活を送っている。やがて家に帰り着き、聖職者の家系であったのでラテン語の聖書の勉強をし、大陸から送られてきたアイルランド最初の Bishop である Palladius の跡を継いで、435年頃アイルランドに渡ったようである。彼の布教はアイルランド全土にわたり、多くの人々がキリスト教に帰依して、あまたの修道僧 monk や修道女 nun を育てたと言われる。

聖パトリックは、その表象である3枚葉のシャムロックを用いて、三位一体の教理を説いた

と伝えられる。また一つの伝説としてではあるが、アイルランドの国をすべての蛇の支配から解き放ったとも言われる。[13] ところで、シャムロックとはアイルランド語 seamrog（小さなクローバーの意）の訛りだと言われるが、聖パトリックのシャムロックが実際にどのような植物を指していたのかについては、種々の説があって一定しない。一つの有力な説として、それはミヤマカタバミを指すとする説があるが、今日アイルランド各地でこの日に人々が身につけるのは、lesser yellow trefoil と称するクローバーである。

☆「lesser yellow trefoil の4つ葉、5つ葉のものは、偶然見つけたものであれば幸運のお守りになる」と信じられる。

聖パトリックはA.D.461年3月17日に没した。この日を聖パトリックの祝日として、本国はもちろん世界中にいるアイルランド人が大いに祝う。イングランドでは伝統行事として、王室縁の者がアイルランドの近衛兵たちにシャムロックの束を贈る。シャムロックは、今ではアイルランドのエムブレムとなっている。さらに聖パトリックは、アイルランドのみならずスコットランドの高地地方や島々でも大変崇敬されており、同聖人の祝日は、春の最初の日として広く人々に喜び迎え入れられる。例えばヘブリデス諸島では、この日には朝方、南風が吹き、それに乗って聖人が島に到着し、夕方になると風が北風に変わり聖人をアイルランドに送り届ける、と言い伝えられている。[14]

アメリカのニューヨークには、ローマ・カトリックの St. Patrick's Cathedral があり、そのゴシック様式の壮麗さは人々の注目をひくが、この祝日にこの教会関係者やアイルランド移民たちが、5番街の大通りを誇らしげに行進する行事は一つの見物になっている。

4 節欲の四旬節 Lent

キリスト教文化圏の人々にとって最大の祭りの一つとされる復活祭 Easter（春分3月21日頃以降の満月後の最初の日曜日）に向けては、いろいろな祭りと行事が行われる。その諸祭、諸行事が含まれる全40日間の総称が四旬節 Lent である。

四旬節の諸祭、諸行事としては次のようなものが挙げられる。先ずは四旬節に入る前日の「懺悔火曜日 Shrove Tuesday（パンケーキ・デイ Pancake Day）」、そして四旬節に入ってからは、初日の「灰の水曜日 Ash Wednesday」、第4日曜日の「母親訪問日 Mothering Sunday」、第5日曜日の「エンドウ豆の主日 Carlings Sunday（Passion Sunday）」、さらにEaster直前の日曜日の「しゅろの主日 Palm Sunday」等である。

そもそも四旬節とは、復活祭前の40日間を指し、キリストが伝道を始める前に荒野で過ごした40日間の断食と黙想の修業を記念する期間である。キリスト教信徒にとって、自省を深め、懺悔をし、さらに悔悛を表す時期であることは今日も昔と変わりはない。かつて宗教改革以前には、断食が厳しく強いられ、特別な場合は別として肉、卵、乳製品を食することは許されなかったし、性的関係を持つことも禁じられていたとされる。

☆「四旬節に結婚するのは縁起が悪い。結婚すれば、不幸に見舞われることになる。」

一部の人々の間では、今日でもそうした固定観念にとらわれる向きがある。次のような古い俚謡が、David Pickering, *Cassell Dictionary of Superstitions* で紹介されている。

If you marry in Lent, / You will live to repent. [15]

（もしも四旬節に結婚すれば、一生、後悔して暮らすことになるだろう。）

また、懺悔をする者の留意点として、次のようなことも言われる。

☆「懺悔者は、この期間中新しい衣服を着るのを控えるべきである。」

(1) 懺悔節火曜日 Shrove Tuesday（四旬節に入る前日）とパンケーキ

懺悔節火曜日 Shrove Tuesday は復活祭の41日前で、大体2月3日から3月9日までの間に訪れる。Shrove とは shriven つまり forgiven（許される）の意味があり、かつては人々は、司祭に自らの罪を告白し許しを乞うた。この告白と許しの後で、翌日からの節欲生活に入るために、家の中にあるすべての肉、卵、ラードなどを使い切る目的で、パンケーキを焼くのが常であった。

この日の食べ物に関して、Shakespeare, *All's Well That Ends Well* には次のような言葉が見出される。この箇所は、道化の台詞の一部であるが、個々のもの同士で「ぴたりと合うもの」の例が挙げられている。

... as a pancake for Shrove Tuesday, ...[16]（、、、懺悔節火曜日にはパンケーキのように、、、、）

パンケーキを焼く理由は2つある、とされる。一つは、この日に教会で懺悔を乞うために長い間待つ人々の食べ物として焼かれ、教会に出かけるときにそれを持って行ったというもの。もう一つは、四旬節の節欲生活に入る前に、家の中の肉類その他の脂肪食品類を使い切るためにパンケーキを焼いた、というものである。[17]

この日、英国ではかつて至る所で、熊いじめ bear-baiting や闘鶏などが行われ、人々はよく戸外で一日を過ごしたとされる。しかし今日ではほとんどの人々は、この日にはパンケーキを焼くこと以外には、もはやことさらの活動はしていないと言ってもよいであろう。また、かつてはこの日が休日であったことさえ、今では忘れられているようである。今日その数は減りつつあるが、一部の教会では鐘 Pancake Bell を鳴らせて、「主婦にパンケーキを焼く時間であることを告げる」ところもある。その中には Northumberland 州の Berwick-upon-Tweed や、North Yorkshire の Richmond と Scarborough などが含まれている。

かつてこの日が休日であった名残の一つとして、Bedfordshire の Toddington では、鐘の音を合図に小学生たちが教室から飛び出していき、近くの Conger Hill の丘に駆け上がり、次のような楽しい行為をするのが見られる。

☆「コンガー・ヒルの丘の地面に耳を当てると、地下でパンケーキの魔女 Pancake Witch がパンケーキをジュージュー焼いている音が聞こえる」[18] と言われる。

Buckinghamshire の Olney のようなところでは、数百年前と同じように教区の教会で Pancake

Bell がいまだに鳴らされ、人々に罪を告白しにくることを思い出させる。伝えられるところでは、1445年、Olney のある主婦が忙しくパンケーキを焼いていたが、そのとき鐘の音を聴き、まだ懺悔をして許しを乞うていなかった彼女は、エプロンをしたまま手にパンケーキの入った煙の出ているフライパンを持って、村の通りを走って教会へと急いだ。これがもとでオルニーでは、今日のようなパンケーキ・レースが行われるようになったと言われる。レースのルールは、エプロン姿で頭に被り物をし、スラックスやショートパンツ姿はだめとされる。さらに、町の広場から教会までの間に、ケーキを少なくとも3回はフライパンから持ち上げねばならないとされる。[19]

アメリカの Kansas 州の Liberal でも、同様の競技が行われるようになり、当日には Olney との間で電話連絡を取って、優勝者のタイムを競っている。アメリカでは、この競技の関連から、この日を Doughnut Tuesday と呼んでいる。なお、この日、英米の各地では、今日でもフットボール試合（Derbyshire の Ashbourne）や、縄跳び大会（Yorkshire の Scarborough）などが行われ、古きよき昔の名残が一部見られるところもある。

一般に、パンケーキは縁起がよいものと考えられている。恐らくそれは、このケーキには薬草のような幸運を呼ぶ成分が含まれている、と考えられるためであろう。

☆「懺悔節火曜日にパンケーキを食べれば、次の12ヶ月間の幸運が保証され、お金や食べ物に不自由することがない。ただし、パンケーキは夕方の8時前までに食べなければならず、そうしなければ不運なことが起きる」とされる。

☆「雄鶏にパンケーキを差し出して、雄鶏がそれを食べずに雌鳥に残しておくことを期待する。もし期待通りになれば、幸運が保証される。だが雄鶏がそれを自分で食べてしまったら、それは不幸の先触れである」と言われる。[20]

☆「差し出したパンケーキを食べようとして雄鶏のところにやってくる雌鳥の数は、少女が結婚するまでに待たねばならない年数を表す。」一部にはこうした伝承も見られる。

終わりに、パンケーキを投げる慣習の由来について記しておきたい。通説的には2つの由来があるとされる。一つは、かつてこの日の闘鶏の催しで、鳥を空中に放り上げて互いに闘わせたが、そのスポーツに由来するもの。もう一つは、この聖なる日に役済みの娼婦を宿から投げるように放り出した、との古代の風習に由来するものである。[21] しかしながら、この慣習は、翌日から四旬節の節欲生活をしなければならない人々が、このおいしい食べ物を「投げる」ことによって、平素の安楽な生活への「思い切りをつける」、すなわち「気持ちにけじめをつけようとする」ことに結びつきがあるのではないか、とも思われる。

［次号「灰の水曜日・母親訪問日・エンドウ豆の主日・シュロの主日」等に続く。］

Acknowledgements：

貴重なご教示をいただいた Amy Chavez 氏（元、中国短大講師）に、感謝申し上げる。

Notes:

1）"Valentine," *Oxford English Dictionary* (Oxford: Oxford U.P., 1998).
L. *Valentīnus*, the name of two early Italian saints, both commemorated on the 14th of February.

2）Geoffrey Chaucer, *The Parliament of Fouls*, 309-11, The Riverside Chaucer, 3rd Ed., gen. ed. Larry D.Benson (Boston: Houghton Mifflin Company, 1987).

3）John Donne, *"An Epithalamion, or Marriage Song on the Lady Elizabeth, and Count Palatine Being Married on St. Valentines Day," John Donne Poems, 1633* (Menston, Yorkshire: The Scolar Press Limited, 1969) 118; orig. *Poems, by J. D. with Elegies on the Author's Death* (London: [Printed by] Miles Flesher [for Iohn Marriot], 1633).

4）"St.Valentine's Day," *Cassell Dictionary of Superstitions*, ed. David Pickering (London: Cassell, 1995) 229(L).

5）"St.Valentine's Day," Pickering, 229(L).

6）Tad Tuleja, *Curious Customs* (New York: Harmony Books, 1987) 156.

7）"Valentine," *Dictionary of Symbols and Imagery*, ed. Ad de Vries (Amsterdam: North-Holland, 1974) 484(L).

8）Samuel Pepys, "*Diary*, February 16, 1667," *The Diary of Samuel Pepys*, ed. Robert Latham and William Matthews, vol.Ⅷ, 1667 (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, 1974) 65.

9）"Valentine's Day," *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly (London: Thames and Hudson, 1986) 226-27.

10）Margaret Joy, *Highdays and Holidays* [anno. H. Funado] (Tokyo: Kinseido, 1983) 7.

11）William Shakespeare, *Henry V*, 5-1, 2, The Arden Edition of the Works of William Shakespeare, ed. T.W. Craik, paper (1964; London: Routledge, 1992).

12）Shakespeare, *Henry V*, 4-7, 97-99.

13）"March 17," *The Perpetual Almanac of Folklore*, ed Charles Kightly (London: Thames and Hudson, 1987).

14）"March 17," *The Perpetual Almanac of Folklore*, Kightly.

15）"Lent," Pickering, 156.

16）William Shakespeare, *All's Well That Ends Well*, 2-2, 22-23. The Arden Ed., ed. G.K. Hunter, paper (1967; London: Routledge, 1991).

17）"Pancake," *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E.& M.A.Radford (New York:Philosophical Lib., 1949; New York: Greenwood, 1969) 185(R).

18）"Pancake Bells," *The Customs and Ceremonies of Britain*, Kightly, 183(R).

19）Joy, 15.

20）"Pancake," Pickering, 199(R). / "Pancake," Radford, 185(R).

21）"Pancake," Pickering, 199(R).

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural Background of the English & the Americans — (13) Ⅳ The Year's Celebrations Part 2: On the Customs and Superstitions of St. Valentine's Day, St. David's Day, St. Patrick's Day, Lent and Shrove Tuesday

Kunihiro FUJITAKA
College of Life Science
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received September 24, 2004)

When we ask the reason why people celebrate festivals, we surely come to a reasonable answer: as they lead a customary life every day, they are apt to become stereotyped. In order to keep their bodies and souls more active, they need some pleasant events, or festivals, in their life which they expect will give themselves moderate tension, much vigor, and above all, lots of fun.

We know that it is very significant for people to take part in various festivals in the society to which they belong. Their participation to them will mean that they can have true feelings about life in common as the members of the community where they live every day. As a result, they come to receive and maintain the culture and tradition of the community. In other words, it means that they will receive and enhance the culture and tradition of the nation.

In the present writing, we would like to speculate on the customs and superstitions of some festivals — St. Valentine's Day, St. David's Day, St. Patrick's Day, Lent and Shrove Tuesday, exemplifying several practical usages from English literary works. And in this speculation, we would like to pay special attention to examining historical and cultural aspects of those festivals.